

『堀河百首』の「苔」題の歌をめぐって

著者	竹下 豊
引用	女子大文学. 國文篇 : 大阪女子大學紀要. 2005, 56, p.15-32
URL	http://doi.org/10.24729/00011063

『堀河百首』の「苔」題の歌をめぐって

竹下 豊

はじめに

『堀河百首』の百の歌題の中には、それ以前の王朝和歌において、ほとんど歌題として詠まれたことのないものが見られる。本稿で考察しようとする題「苔」が、その代表的なものである。萩谷朴氏の『平安朝歌合大成』は、平安朝における歌合を証本のないものも含めて集めた労作であるが、その中にも、「苔」に関連する題は一例しか見出せない。萩谷氏が康平五年（一〇六二）七月二十七日の成立と推定する『無動寺和尚賢聖院歌合』に、歌題「青苔」が見え、二首が詠まれている。これが『平安朝歌合大成』に載せる歌合のうち、唯一、「苔」を歌題とした歌合である。

ゆき通ふあと見えぬまでふかみどり色さびにけり庭のこけ
ぢは
（青苔・六番左・長寛僧都）

『堀河百首』の「苔」題の歌をめぐって

苔の色のいつもかはらぬ山路には秋くることぞ知られざりける
（同右・朝増阿闍梨）

また、『古今六帖』は、卷六に「苔」の部類を設け、

ときはなる松にかかれる苔みれば年のをながきしるべとぞ思ふ
（三五三九）

をはじめ、四首を収める。類題和歌集に属し、和歌の題材や素材を網羅した『古今六帖』には、さすがに「苔」の部類はあるが、『堀河百首』の題の設定に影響を与えた『和漢朗詠集』には、「苔」の部類は見えない。また、八代集の詞書の中に、歌題としての「苔」を明示している例は一首もない。

このように、和歌の歌題としては一般的とはいえない「苔」題の歌を詠むのに、『堀河百首』の歌人たちは、どのように先行作品に学び、その表現技巧や発想、趣向などを自らの作品に摂取したのかを、漢詩文摂取の場合を中心に述べてゆくことに

したい。

一

まず、『堀河百首』の作者のうち、和漢兼作を称えられ、漢詩文にも造詣の深い大江匡房の「苔」題の歌を取り上げたい。

① 深みどりはほが上にむす苔や空にのほらぬ煙なるらん

(苔・一三三〇)

この匡房歌は、巖の上に生ず深緑の苔を煙に見立て、実は煙ではないから空に立ちのぼらないのだと智的趣向をめぐらした一首である。『新編国歌大観』を検する限りでは、王朝和歌において、他に苔を煙に見立てた歌を見出すことはできない。匡房歌は極めて特殊な見立ての歌というべきである。この見立ての意外性こそが一首の趣向なのであるが、匡房のことだから、当然、漢詩文からの影響が考慮されねばならない。そして、早くに漢詩文の影響を指摘しているのが、吐屑庵慈延の『堀河院類聚百首鈔』(寛政十二年春序、享和三年夏刊)である。同書は、

春霖催得鎖煙濃 竹院莎齋徑小通

(『全唐詩』卷七百四十九・李中「春苔」)

春霖催し得て鎖煙濃きなり 竹院の莎齋徑小に通ず

撥浪輕拈出少時 一抔濃煙三四尺

(同・卷六百三十七・顧雲「苔歌」)

浪を撥ひ輕く拈みて出づること少時にして 一抔の濃煙三四尺

の傍線部を挙げ、「これら苔の縁筆を煙に見たてたる也。されど、苔は岩のうへばかりなれば、空にのほらぬ煙ぞと也」と述べている。李中詩の詩題が「春苔」、顧雲詩が「苔歌」とあるように、「苔」は漢詩文の世界では普通に用いられる詩題であり、素材である。そして、匡房歌のごとき苔を煙に見立てる発想は、本来、中国の漢詩文の世界に由来するものであることは明らかであるが、このことは、匡房が中国の漢詩文に倣ったということを直ちに意味するわけではない。おそらく中国の漢詩文に学んだのであろう、わが国の漢詩文にも同様の発想は見えているのである。

瀑布水高清漢冷 莓苔橋滑碧煙虛 張蕭遠 送道器上人

遊吳江 (千載佳句・下・幽居・一〇一七)

瀑布水は高くして清漢冷かに 莓苔橋は滑にして碧煙虚し

遂使結煙之苔鬢、半變其青、噴雪之泉脈、漸欠其白者也。

(本朝文粹・卷十・三一八・高丘相如「初冬於長樂寺同賦落葉山中路」詩序)

中路「詩序」

遂に煙を結ぶ苔の鬢びんをして、半ば其の青を変じ、雪を噴く泉の脈をして、漸く其の白を欠かしむるものなり。

はじめの「千載佳句」の例は、苔の生えた橋は滑らかなので、青い煙が立つようには見えないと解され、苔を煙に見立てる発想を前提として詠まれたものと考えてよいと思われる。また、高丘相如詩も「煙を結ぶ苔の鬢」とあるから（「苔鬢」も苔の見立て表現であるが、後に言及する）、苔を煙に見立てた表現と見てよろしかろう。

荒籬老菊裁秋雪 微径寒苔踏暮煙

（本朝無題詩・卷十・六九一・藤原明衡「秋日遊雲林院」）

荒籬の老菊秋雪を裁ち 微径の寒苔暮煙を踏む

本間洋一氏は、「暮煙」について、「夕暮れのモヤ。ここは苔を見立てたとも、苔の上に層を成してただよう水気モヤとも考えられる」と述べているが、（注1）両句は対句を成しており、老菊を秋雪に見立てることと、寒苔を暮煙に見立てることが対を成していると考えられる。

残苔繞砌暮煙緑 槁葉灑階晴雨紅

（本朝無題詩・卷六・三八四・藤原茂明「秋日林亭即事」）

残苔砌を繞りて暮煙緑なり 槁葉階きざはしに灑きて晴雨紅しも、第二句が階に降りそそぐ槁葉（枯葉）を、晴れているのに

「堀河百首」の「苔」題の歌をめぐって

降る赤い雨のように見立てるのに対し、石畳をめぐる残苔（色あせた苔）を、緑色を帯びた夕暮れ時の煙に見立てた表現と理解してよいかと思われる。さらに、もう一例だけ挙げよう。

粘石旧苔煙悴短 当窓寒菓雨来低

（本朝無題詩・卷七・四六五・釈蓮禪「山村暮秋」）

石に粘つきたる旧苔は煙悴おとしろへて短く 窓に当たる寒菓は雨来りて低たる

作者の蓮禪は応徳三年（一〇八四）生まれ（注2）というから、長治二、三年（一一〇五、六）の成立とされる「堀河百首」よりは後の作と見るべきであろうか。

また、次の摘句のように、蕨を煙に見立てた例も見出せるが、これも早蕨の時分の蕨の穂、その紫色の細毛（注3）を煙に見立てたものと思われ、苔の縁筆と似通ったものを見出しているのである。

孤竹二子之去周 春薇煙老 五柳先生之遁晋 秋菊霜寒

天台田明房月前閑談 以言 （新撰朗詠集・隠倫・五一〇）

孤竹二子こちくじが周を去る 春の薇煙老わらびいたり 五柳先生が晋のを遁のがる 秋の菊霜寒し

なお、この「孤竹二子」は、殷の紂王を討とうとした周の武王を諫め、それが聞き入れられず、周の天下統一後、首陽山に

隠れて薇を採って食したが、遂に餓死したという伯夷叔斉のこ
と（「史記」伯夷列伝）、「五柳先生」は、勿論、菊をこよなく愛
したという陶淵明のことである。

このように『堀河百首』の匡房歌の巖の上に生ず深緑の苔を
煙に見立てる発想は、漢詩文の見立てを和歌の世界に持ち込み、
従来歌にはない珍しさを出そうとしたものであった。

菅原為長（一一五八—一二四六）の『文鳳抄』は、実際に詩文
に用いられたり、或はまた用いることを念頭において、参考の
為に、膨大な量の語彙を書き留めたものとされているが、その
「苔」の項に、

漠々^{モクモク} 煙 緑 青 錢 席 茵 …… 皆以^テ一字^ヲ有^ス
苔意^ヲ。
（卷八・草樹部）

と記す。ここに「煙」も挙げられており、漢詩文の世界では、
苔を煙に見立てることが行われていたことが、改めて確認され
るのである。

『文鳳抄』の記載について、少しく触れてみると、「錢」につ
いては、『初学記』に「苔」の一名として「緑錢」が見える。

広志曰、空室無人行則生苔蘚、或青或紫、一名円蘚、一名
緑錢。
（卷二十七・苔第十六）

『文鳳抄』にも、右の引用の後に「列「青錢」と記す。そし

て、わが国の漢詩にも、

水諳帯長魚撥断 霜苔錢破鳥行残

（田氏家集・卷下・一四三「冬初過藤波州「翫池景物」」）

水諳帯長くして魚撥断ゆ 霜苔錢破れて鳥行残る

と、点々と生えている丸い苔を、錢の形に喩えた例がある。し
かし、さすがに和歌の方では、『古今集』の伊勢歌（雑下・九九
〇）で「瀬に」と「錢に」を掛けている例があるものの、ほと
んど錢が詠まれないこともあって、用例を探すのは困難である。

なお、匡房歌について、家永香織氏は、煙の色を緑とする発
想は、

消尽雪青湖寺路 晴来煙緑洞庭沙

（新撰朗詠集・草・四〇八）

消え尽きては雪青し湖寺の路 晴れ来たては煙緑なり洞

庭の沙

などに見られる、と指摘する。^{（注5）}和歌の方では、煙の色を緑と詠
んだ一首として、

鳥たくみどり

難波人あしの青葉やほさでたくみどりにかすむ夕けぶりか
な
（正治初度百首・一一九四、続千載・雑体・七二七、俊成）

と物名歌に詠まれた例があるが、これは極めて珍しい。匡房は、

漢詩文の見立てを和歌に持ち込み、苔を煙に見立てて一首を詠んでいるのであるが、煙の色を緑と詠んでいる点についても、漢詩文の影響を考慮すべき余地があると思われる。

二

引き続き、『堀河百首』の「苔」題の歌で、漢詩文の影響を受けていると思われる例を見てゆきたい。

としふれば苔のみづらを結びかけて岩の姿ぞ神さびにける

(一三三七・師時)

根もなくていはほの上にむす苔は髪をおほへる心地こそすれ

(一三四一・肥後)

師時歌においては、「岩の姿」を「苔の角髪みづらを結びかけて」と詠み、肥後歌では、「巖の上にむす苔」を「髪をおほへる心地」がすると詠んでいる。いずれも苔を毛髪に見立てた歌である。家永香織氏は、師時歌について、「なお、漢詩文には、苔をひげにみたてた『苔鬚』という表現がある」と注する。(注)これは、おそらく、

気霽風梳新柳髪 水消浪洗旧苔鬚 都

(和漢朗詠集・早春・一三)

気霽れては風新柳の髪を梳くしけつる 水消えては浪旧苔の鬚ひげ

『堀河百首』の「苔」題の歌をめぐって

を洗ふ

を指しているであろう。先に苔を煙に見立てる例として挙げた「遂使結煙之苔鬚(遂に煙を結ぶ苔の鬚)」の「苔鬚」(「鬚」は頭の左右の髪の毛)も同様の例として扱ってよいだろう。

和歌の方では、『堀河百首』と同時代の歌人である源仲正に次の一首がある。

年へたるいはほが上に雪ふりておひにけらしな苔の白鬚

(夫木抄・雑十・苔・一三三二九・詞書「苔上雪」)

この仲正歌は、古色蒼然たる巖の苔に雪が降ったことから、それを「白鬚」に見立てた一首であるが、先の『和漢朗詠集』の摘句を踏まえたものである。これが、管見の範囲で、『堀河百首』以前あるいは同時代において、苔を髪およびそれに類するものに見立てた唯一の例である。とすれば、苔を髪に見立てる師時歌や肥後歌にも、漢詩文の影響を考えなければならぬだろう。そして、苔を髪に見立てたと思しき例は、早くは『文華秀麗集』に見えている。

莓苔踏破経年髪 楊柳未懸伸月眉

(卷上・二・嵯峨天皇「春日嵯峨山院、探得」遅字、一首)

莓苔踏破す年を経し髪 楊柳未だ懸けず月を伸ぶる眉

引用の一句目は、長い年月を経た古い苔を「経年髪」と詠ん

のごとき「石髮」の例を見出す。『千載佳句』の摘句では、「石髮と「墻衣」(垣根の苔)が対を成し、『新撰朗詠集』の摘句においては、苔の一名である「石髮」と「水衣」が対として用いられている。

このように、苔の別称で、和名を「知比佐岐古介(小さき苔)」とする「石髮」は、わが国の漢詩にもその用例が見られ、古辞書にも記載されているが、そもそも「石髮」という漢語そのものが苔の見立てによるものであろう。そして、この「石髮」という漢語の持つイメージから連想されたのが、苔を石の毛髮に見立てる発想であり、わが国の漢詩文にも詠まれているこの発想を、先行する詠歌例の少ない「苔」の歌に用いたのが、『堀河百首』の師時歌と肥後歌であろうと思われるのである。そして、『堀河百首』の影響の強い『為忠家初度百首』の「苔上露」題に、この発想によって詠まれた一首が見える。

岩のうへのうちたれ髪とみるほどに露おきかざる玉かづら
かも (三七二・藤原忠成)

この忠成歌は、岩の上の苔を「うちたれ髪」と見たら、それは苔の上の露の玉に飾られた玉鬘であったと詠んでいる。苔を髪に見立てる発想を前提にしながら、それを一捻りして、髪ならぬ、露という玉を連ねた髪飾りに見立てたところに工夫がある。

【堀河百首】の「苔」題の歌をめぐって

る。

しかし、この苔を石の髪に見立てる発想の歌は、『堀河百首』以後もほとんど詠歌例を見出せない。やはり、漢詩文的世界にとどまって、和歌世界には受け入れられなかったというべきであらう。これは、次節において言及する、「苔」を「衣」に見立てる漢詩文的発想の受容と好対照をなしているといっている。

三

さらに、『堀河百首』の「苔」題の詠歌の中に、漢詩文的発想によると思しき歌がある。

白雲のたちゐる山の苔むしろわれがかたしく衣とぞ思ふ

(一三四〇・水縁)

この水縁歌は、苔を筵に見立てた「苔むしろ」を詠むとともに、それを、さらに衣に見立てるといふ二重の見立てを用いた一首である。ここでは、苔を衣に見立てる発想について言及することにした(「苔むしろ」については後述)。

苔を衣に見立てる例は、

飛壁巖巖垂蘿薜 層巖盤屈衣苔莓

(經国集・卷十四・嵯峨天皇「清涼殿画壁山水歌、一首」)

飛壁巖巖蘿薛垂れ 層巖盤屈苔莓を衣る

がある。第二句は、清涼殿の壁に画かれた山水図のうち、畳み重なった巖石が屈曲し、それに衣を着たかのように苔が生えている様を詠んだものである。また、『堀河百首』の歌人たちが、百の歌題を詠む際に、大いに参看した『和漢朗詠集』にも見える。

苔生石面軽衣短 荷出池心小蓋疎 物部安興

(首夏・一四八)

苔石面に生ひて軽衣短し 荷池心より出でて小蓋疎かなり

この摘句の第一句は、石に生えた苔を夏の衣に見立てている。首夏にうつすらと生えてきて、まだ伸びていない状態の苔を、軽くて薄い夏衣を袖の短いまま着ているように見立てたのである。苔を衣に見立てる例は、

白雲似帶困山腰 青苔如衣負巖背 (江談抄・一五・都在中)

白雲帯に似て山の腰を困り 青苔衣の如く巖の背に負はる

の第二句にも見られる。ここでは、大きな岩に生えた青い苔を、岩の背におぶさった衣に見立てているのである。『和漢朗詠集』(一四八)の摘句の苔を衣に見立てることについて、「苔を衣に

形容するのは、唐、劉滄「僧と旧を語る」詩に「石池春色苔衣に染まる」などがある」と指摘されているように、この見立ても、本来は漢詩文のものであった。

ここで言及しておきたいのは、先に「初学記」やわが国の古辞書を引いて述べたごとく、苔の一名を「石衣」ということである。これも、「石髪」と同じく、石に生えた苔を衣に見立てたことから生じた漢語であろう。また、苔を称しての「苔衣」という漢語は、わが国の漢詩にも見られる。

樹掛葛蘿依石閣 山低虹帯繞苔衣

樹は葛蘿を掛けて石閣に依る 山は虹帯を低れて苔衣を繞らす (田氏家集・卷中・七六「秋暮傍山行」)

葉錦照林如雨染 苔衣懸岸被波縫

(本朝無題詩・卷六・四一四・釈蓮禪「冬日宇治別業即事」)

葉錦は林に照りて雨に染められたるが如く 苔衣は岸に懸かりて波に縫はれたり

泉洗苔衣飛石背 嵐裁葉錦灑林頭

(同・四三二・藤原知房「秋日別業即事」)

泉は苔衣を洗ひて石背に飛び 嵐は葉錦を裁ちて林頭に灑く

苔を衣に見立てる漢詩文的発想や苔を「石衣」とも称するこ

とからの連想を和歌の世界に持ち込んだのが、『堀河百首』の永縁歌と思われるのであるが、その後、『為忠家初度百首』に同じ発想の一首を見出すことができる。

巖上躑躅

としをへて苔の衣に春くればつつじのうはぎ着るいはねかな

(一一八・藤原為盛)

この為盛歌は、苔の青い衣を着ていた巖が、春になって、その巖の上に咲いた躑躅をさらに上着として着ているかのごとくに詠んだ一首である。これは、苔を衣に見立てることを前提として成り立っている歌である。

そして、その後の同発想の歌は多くはないが、新古今時代の一時期、流行したようである。

苔

山人のふかき岩屋にむす苔はたたぬ衣をほすかとぞみる

(壬二集・一一一九)

寄苔雜

おいはつる我が身にいかでかたらん岩だに着ける苔の衣を

(同・一四三九)

苔

岩の着る苔の衣のさびしきも春の色をば忘れざりけり

『堀河百首』の「苔」題の歌をめぐって

(拾玉集・七八六、「楚忽第一百首」)

苔為石衣

山川の流れ久しき谷かげも苔の衣を着ぬ岩ぞなき

(同・八八五、「詠百首倭歌」)

苔は岩の衣たり

いはそそくたるみの下にむす苔はうき世をいとふ袖かとぞ

みる

(寂蓮結題百首・八四)

滝苔、八幡、

山姫の織るてふ布にかけそへてたがほす苔の衣なるらん

(寂身法師集・二七九)

岸苔

我がいほの岸べにさほす衣かとみるまで苔のおひにけるか

な

(宝治百首・三六二・真観)

いずれの歌も「苔」に関する歌題の歌であること、百首歌の詠歌例が多いことに注目すべきである。『堀河百首』が後世の百首歌に与えた影響をここにも確認できる。そして、詠歌例として挙げた七首のうち、苔を岩の着る衣と詠んでいる歌が三首、苔を衣を干しているかのように詠んだ歌が三首とその大半を占める。また、歌題に「苔為石衣」(拾玉集・八八五)、「苔は岩の衣たり」(寂蓮結題百首)と、苔は岩の着る衣という見立てをそ

のまま題とした歌も見えている。同じ苔の見立てに由来すると看做してよいと思われる「石髪」の場合とは、その後の受容のあり方が異なっているのである。

それに関して想起しておかなければならないのは、すでに和歌においては「苔衣」あるいは「苔の衣」が歌語として通用していたことである。

いその神といふ寺にまうでて、日の暮れにければ、
夜あけてまかり帰らむとてとどまりて、この寺に遍

昭侍りと人の告げ侍りければ、物言ひ心見むとて言

ひ侍りける

小野小町

岩のうへに旅ねをすればいと寒し苔の衣を我に貸さん

返し

遍昭

世をそむく苔の衣はただひとへ貸さねばうとしいざふたり

寝ん

(後撰・雑三・一一九五、一一九六)

この小町と遍昭の応酬については、片桐洋一氏の簡にして要を得た注釈に尽きている。寒いから、岩の上(石上)の苔という縁で僧衣である「苔の衣」をお貸しいただきたいというのが、小町歌である。「新古今集」は、僧衣や隠者の衣をいう「苔の衣」を詠んだ前代の歌三首を収めている。

少将高光、横河にまかりて、かしらおろし侍りにけ

るに、法服つかはすとて

権大納言師氏

奥山の苔の衣にくらべみよいづれか露のおきまさるとも

返し

如覚

白露のあした夕におく山の苔の衣は風もさはらず

(新古今・雑中・一六二六、一六二七)

あひしれりける人の、熊野に籠り侍りけるに、つか

はしける

安法法師

世をそむく山のみなみの松風に苔の衣や夜寒なるらむ

(同・一六六三)

このように、苔の総称として「苔衣」、苔の一名としての

「石衣」とは別に、すでに「苔衣」あるいは「苔の衣」という

歌語が成立していたから、歌人たちは、苔を衣に見立てる漢詩

文的発想にもそれほど違和感を持たなかったのではないかと思

われる。先に引いた新古今歌人たちの詠歌のうち、「寂蓮結題

百首」の歌、

いはそそくたるみの下にむす苔はうき世をいとふ袖かとぞ

みる

は、滝の下に生す苔を、「うき世をいとふ」出家者や隠者の着

る「苔衣」の袖に見立てた一首である。「苔は岩の衣たり」と

いう、本来は漢詩文の見立てをそのまま歌題にした歌において、

漢詩文的世界と和歌的世界とが重ね合わされているのである。同様のことは、『壬二集』（一四三九）についてもいえるであろう。このことは、前節で言及した苔を毛髪に見立てる漢詩文的発想が、『堀河百首』の影響の大きい新古今時代においても、まったくといってよいほど影響を産み出さなかった理由の一端を示していると思われる。

四

『堀河百首』の「苔」題の歌一六首のなかで、後世に最も影響を与えたのは、次の二首である。

佐保姫のあそぶ所か奥山の青根が峰の苔のむしろは

(一三三九・公実)

雲かかる青根が峰の苔むしろいく世へぬらん知る人ぞなき

(一三三三・顕季)

この二首では「青根が峰の苔(の)むしろ」が詠まれているのであるが、これは次の万葉歌を出典とする。

詠蘿

み吉野の青根が峰の苔席誰か織りけむ経緯なしに

(卷七・一一二〇)

同じく、この万葉歌を本歌とした歌が『堀河百首』には二首

『堀河百首』の「苔」題の歌をめぐって

見えている。

苔むしろ青根が峰もみえぬまで吉野の山はみ雪ふるらし

(雪・九五四・藤原顕仲)

白雪のふりしきぬれば苔むしろ青根が峰も見えずなりゆく

(同・九五九・紀伊)

『万葉集』の一一二〇番歌の異伝歌と看做される歌が、すでに『古今六帖』に、

春日野の青根が峰の苔むしろたれか織りけんたてぬきなし
に (第二・むしろ・一三九〇)

として見えているのであるが、この本文では「吉野の山」は出てこないであり、『堀河百首』の歌人たちは、『万葉集』に依拠したと考えてよいだろう。万葉歌の題詞には「詠蘿」と記すが、「蘿」は『日本書紀』に見えている。

亦以_三天香山之真坂樹_一為_レ髪、以_レ蘿_二此云_一。為_三手櫛_一、……
(卷一・神代上)

「蘿、此云比叻礙」というから「ひかけ」と訓んでいるのである。また、『和名類聚抄』(十卷本)に、

蘿 唐韵云蘿 魯何反日本紀私記云蘿比加介 女蘿也 雑要決云松蘿一名女

蘿 万豆乃古介一云佐流乎加世 (卷十・苔類百廿二)

とあり(二十卷本は「蘿」と「松蘿」を別項とする)、「蘿」は「女蘿」

であり、「女蘿」は「松蘿」の一名であるという。『新撰字鏡』(天治本)でも「蘿」を「女蘿也」(巻七・草部第七十)とし、「色葉字類抄」(前田本)も「蘿ラウ女蘿」(下・植物付)する。したがって、「和名類聚抄」(十巻本)によれば、「蘿」は「まつのこけ(松の苔)」あるいは「さるをかせ」ということになる。植物学的には、地衣類の「さるおかせ(さるおがせ)」は、蘚苔植物の苔とは別類であるが、同じく苔として扱われていたようである。(注13)

『和名類聚抄』では「蘿」は苔類に入れられており、『類聚名義抄』(観智院本)には「蘿コケヒカケ」(僧上・草部第八十二)とあり、「蘿」を「コケ」とも訓んでいるのである。また、「蘿」を用いた『万葉集』の歌においても、例えば「蘿生尔家里」(巻七・二二四の結句)、「於石蘿生」(同・二三四の第二句)の「蘿」は、次点本・仙覚新点本を問わず、すべて「こけ」と訓まれている。さらに、『懷風藻』に、

石壁蘿衣猶自短 山扉松蓋埋然長

(九〇・藤原宇合「七言 秋日於左僕射長王宅宴 一首」)

石壁の蘿衣猶自し短く 山扉の松蓋埋りて然も長し

と詠まれている「蘿衣」は、「苔衣」と同じく蘿を衣に見立てた表現と考えてよいだろう。とすれば、この宇合詩の「蘿衣」は、わが国の漢詩において「苔」を衣に見立てた最も早い例と

いうことになり、本稿第三節の苔を衣に見立てる漢詩文の例に挙げることもできる。

本節の冒頭に引いた公実歌と頭季歌は、万葉・一一二〇番歌の題詞「詠蘿」を「こけを詠む」と解したうえで、「苔」題の歌を詠むのに、本歌とするの相応しい歌として選び取ったものと思われる。『堀河百首』詠進のための「作歌研究会」のようなものが行なわれ、(注14)そこで、「雪」題で詠まれた藤原頭仲歌や紀伊歌によって、万葉・一一二〇番歌に着目した可能性も考えられるが、それでも、万葉歌の題詞と「苔」題との関連を考慮する必要はあるだろう。因みに、先に引用したように、「古今六帖」に収められた万葉・一一二〇番歌の異伝歌は「こけ」ではなく、「むしろ」に部類されている。

ところで、『万葉集』出典の「こけむしろ」という歌語は、美しい緑色の苔が生えている状態を、筵に見立てた美的表現である。この見立ては、和歌ばかりではなく、漢詩文の世界でも行なわれていたのである。『文鳳抄』の「苔」の項にも「席」が挙げられていたが、我が国の漢詩から若干引いてみよう。(注15)

古石苔為席 新房菴作名(経国集・巻十・笠仲守「冬日過山門」)

古石は苔を席と為し 新房は菴を名と作す
苔席石平看露宿 柴扉門破任風開

(本朝無題詩・卷六・三八二・藤原忠通「秋日林亭即事」)

苔席の石平らかにして露の宿れるを看 柴扉の門破れて
風の開くに任せたり

墻樊後苑唯紅樹 席展前庭是綠苔

(同・四三二・藤原実範「冬日会小野山庄訪土俗」)

墻もて後苑を樊ふは唯紅樹のみ 席もて前庭に展べたる

は是れ緑苔なり

竹亭砌旧苔延席 茅屋檐荒月在衣

(和漢兼作集・夏下・四五六・藤原宗隆「夏」)

竹亭砌旧りて苔席を延く 茅屋檐荒れて月衣に在り

このように、和歌においても漢詩文においても、苔を筵に見立てることが行なわれているのであるが、『万葉集』が漢詩文の影響を受けたということではなく、同じような見立てが別々に行なわれていたと理解した方がよいだろうと思われる。『堀河百首』全体では「苔むしろ」が六首詠まれ、「苔」題の歌では四首、「青根が峰」とともに詠まれたのは三首。「苔のむしろ」は三首で、「苔」題の歌が二首、その中の一首が「青根が峰」を詠み込んでいる。「苔」題一六首のうち七首が「苔むしろ」あるいは「苔のむしろ」を詠み、「青根が峰」とともに詠まれたのは四首である。この事実を、『堀河百首』の歌人たちの

『堀河百首』の「苔」題の歌をめぐって

『万葉集』への関心を勘案したとき、「苔(の)むしろ」が漢詩文からではなく、万葉・一一二〇番歌に学んだものであることを示唆するものといつてよい。

『新編国歌大観』を検する限り、『万葉集』に詠まれて以後、『堀河百首』以前の「苔(の)むしろ」の詠歌例は、『古今六帖』の歌(万葉歌の異伝歌)を除くと、

岩の上の苔のむしろに住むつるは世をさへ長く思ふべきかな
(宇津保物語・藤原の君・二二)

のみである。一方で、『堀河百首』の歌人のうち、俊頼と仲実が別の機会に、次の歌を詠んでいる。

山の雪をよめる

けさはしも青根が峰に雪つみて苔のさむしろしきかへつらん
(散木奇歌集・六六三)

深山落花

残りなく花散りにけり苔むしろ青根が峰の雪のむら消え

(和歌一字抄・上・四八八・仲実)

『堀河百首』の歌人たちが、「苔(の)むしろ」を漢詩文といふよりは『万葉集』から撰取し、和歌に詠んだことは、同時に王朝和歌における「苔」に関する新たな歌語の発掘であったわけであるが——「宇津保物語」の例もあるが——、以後、「苔」に

関する歌語の代表として、多くの歌に詠まれている。それは、緑の筵を敷いたような美しい青苔の印象を鮮やかにとらえた歌語である。歌語の宝庫たる『堀河百首』の新旧・雅俗入り混じった多くの歌語の中でも、印象鮮明な凝縮表現、王朝和歌の優雅な歌語として再生、展開し得る可能性を持った歌語が、『堀河百首』より後の詠歌機会に、『堀河百首』の歌人たちに好んで用いられていることや、後世の歌人たちに影響を与えていることについては、別稿で論じたことがあるが、本節で取り上げた「苔（の）むしろ」もそういう歌語のひとつである。それは、漢詩文にも見られる表現であるということも、なにがしかの寄与はあるかもしれない。『堀河百首』以後、「苔（の）むしろ」を詠んだ歌は多くを数えるが、百首歌・百首歌を歌合に番えたものから四例を挙げて、本節を閉じることにはしたい。

白雲のたちしかかれば苔むしろ青根が峰も名のみなりけり

（為忠家初度百首・六四五・源頼政）

讃岐院位の御時の百首の苔の歌

あとたえて人もかよはぬ奥山にたがため苔のむしろしくらん
（教長集・九〇三）

岩たたむ山のかたその苔筵とこしなへにも物を思ふかな

（長秋詠藻・上・一八五・「述懐百首」の「苔」題）

苔むしろ青根が峰は名のみしてただ白雲のよそめなりけり

（千五百番歌合・雑一・千四百十一番右・通光）

おわりに

『堀河百首』の「苔」題の歌について、漢詩文の影響を中心に述べてきた。本稿で取り上げた歌以外にも、例えば、

うちならず人しなれば君が代はかけし鼓も苔生ひにけり

（二三四三・紀伊）

が、聖王堯の諫鼓の故事を踏まえて詠まれ、『和漢朗詠集』の摘句、

刑鞭蒲朽螢空去 諫鼓苔深鳥不驚 国風

（和漢朗詠集・帝王・六六三・小野国風）

刑鞭蒲朽ちて螢空しく去んぬ 諫鼓苔深うして鳥驚かず

の影響を受けていることなど、言及すべきであるが、紙幅の関

係でいまは省略せざるを得ない。

平安時代の歌学書を検すると、『能因歌枕（広本）』が、

さがり苔とは、きしなどにさがりたるこけを云。

苔衣とは、僧のころもを云。

と、「さがり苔」「苔衣」に言及しているのみで、他に「苔」について言及している例を見出すのは難しい。例えば、清輔の

『和歌初学抄』の「物名」の条に、「草」「蕨」「葵」以下、「葦」「稻」「藻」まで一九項が挙げられているが、「苔」の項は設けられていない。わずかに、「衣」の項に「コケノ衣」の名を記すのみである。鎌倉時代に入って、ようやく、順徳院の「八雲御抄」が、

苔 さがり。万、をすての山のこけのはと云り。こけむし

ろは在「青根峰」。たてぬきなしと云。(卷三・草部)

と「苔」を項目として初めて立てている。また、後半部は、「苔むしろ」と「青根峰」について言及した最初の例と思しい。

この記述は『堀河百首』において注目され、新たな「苔むしろ」という歌語の発掘のもとになった万葉・一一二〇番歌^(注19)についてのもの^(注19)である。なお、上覚『和歌色葉』には、

こけのころも、すみぞめの衣也、僧衣也。(資具部)

の記述がある。同書には、さらに「木草部付葛苔竹」の項目があるにも関わらず、管見に及んだ『和歌色葉』の諸伝本には苔に関する記事を見出せない。

かくのごとく、平安朝の歌学書における「苔」に関する記述は極めて少ない。これも、「苔」が和歌においては、さほど重視されていなかったことを証するものといつてよいだろう。また、漢詩文の世界と違って、少なくとも『堀河百首』までは

『堀河百首』の「苔」題の歌をめぐって

「苔」は和歌の歌題としては一般的とはいえない。これは『堀河百首』の「苔」題の歌が、後の勅撰集に入集した場合でも、一様に「苔」題の歌としてではなく、他の題の歌として評価されたように^(注20)、以後も底流として続いてきたようである。

その「苔」題の歌を詠むのに、例えば、

わが君は千世にやちよにさざれ石のいはほとなりて苔のむすまで(古今・賀・三四三・よみ人しらず)

千とせふる松にかかれる苔ならば年のを長くなりにけらしも(「新編国歌大観」第七巻所収「躬恒集」・一三八)

……この寺(引用者注―龍門といふ寺)のさまは雲のなかより滝は落つるやうに見ゆ。山の人の家といふはいたう年経て岩の上に苔八重むしたり……(伊勢集・七の詞書)

に代表されるような、従来の和歌における長い時間の経過や古色蒼然とした状態の形容とは違った新しさ、珍しさを出すために、『堀河百首』の歌人たちは、漢詩文における発想や見立て、趣向などを、自らの作品に摂取している。あるいはまた、「石髪」や「石衣」のような漢語が喚起するイメージによって、一首を詠んでいるとも考えられる。

歌人たちが学んだ漢詩文の発想や見立ては、本来は中国の漢詩文のものであっても、本稿でその例を挙げたごとく、その影

響を受けたわが国の漢詩文にも見られるものであり、その点において、突飛なものではなかったと思われる。「苔」は歌材として用いられることはあっても、先行の詠歌例は必ずしも多様であるとはいえない。また、歌題としても一般的でなかった「苔」題の歌——この題の設定自体が、歌人たちに、さまざまな新しい試みを要求したであろう——をいかに詠みこなすかという際に、漢詩文の世界の発想や見立てなどを取り込むことは、独自性と多様性を目指す歌人たちにとって、有効な方法のひとつだったのである。

本稿の引用で特に断らない和歌や漢詩文は「新編国歌大観」によるが、適宜漢字を当て、表記を改めた箇所もある。また、その他の主要な引用は次の資料による。

- ・「千載佳句」…金子彦二郎『平安時代文学と白氏文集 句題和歌・千載佳句研究篇』（培風館、昭和十八年十二月）
- ・「本朝文粹」…大曾根章介・金原理・後藤昭雄校注『本朝文粹』（新日本古典文学大系27、岩波書店、平成四年五月）、訓読は柿村重松『本朝文粹註釈 上、下』（新修版、富山房、昭和四十三年九月）を参照した。
- ・「本朝無題詩」…本間洋一注釈『本朝無題詩全注釈 一〜三』（新典社、平成四年三月〜平成六年五月）
- ・「和名類聚抄」（十卷本）…静嘉堂文库蔵松井簡治旧蔵本。『和名類聚抄（十卷本）』（原裝影印版 古辞書叢刊、古辞書叢刊刊行会、昭和

和五十年一月）による。

- ・「和名類聚抄」（二十卷本）…大東急記念文库蔵本。『和名類聚抄（二十卷本）』（原裝影印版 古辞書叢刊、古辞書叢刊刊行会、昭和四十八年一月）による。

- ・「類聚名義抄」（観智院本）…正宗敦夫編『類聚名義抄 第一、二卷』（風間書房、昭和四十九年九月）。『類聚名義抄観智院本 仏、法、僧』（天理図書館善本叢書^{和書}32〜34、八木書店、昭和五十一年九月〜同年十一月）も参考した。

- ・「色葉字類抄」…中田祝夫・峯岸明編『色葉字類抄研究並びに索引^{本文}編』（風間書房、昭和三十九年六月）。前田本については前田育徳会尊経閣文库編『色葉字類抄 一 三卷本』（尊経閣善本影印集成18、八木書店、平成十一年一月）も参考した。

〔注1〕「本朝無題詩全注釈 三」（新典社、平成六年五月）当該詩の

【語釈】の項

- 〔注2〕菅野禮行・徳田武校注・訳『日本漢詩集』（新編日本古典文学全集86、小学館、平成十四年十一月）

- 〔注3〕『和漢朗詠集』（早春・一二・小野篁）の摘句に「紫塵嫩蔵人拳手（紫塵の嫩き蔵は人手を拳る）」とある。

- 〔注4〕本間洋一校注『文鳳抄』（歌論歌学集成別巻二、三弥井書店、平成十三年十二月）

- 〔注5〕『堀河院百首和歌』（和歌文学大系15、明治書院、平成十四年十月）の当該歌校注。

- 〔注6〕〔注5〕に同じ。

- 〔注7〕『堀河百首』に関する論考を陸續と発表されてきた内藤愛子氏も、師時歌と肥後歌について『白氏文集』の「遊^三悟真寺^一詩」の

「石髪垂若_レ髪」の詩句の表現に基づいたものと指摘されている
〔「堀河院御時百首和歌」の雑部をめぐって―「和漢朗詠集」と
漢詩文学―〕（文教大学女子短期大学部「研究紀要」第25集、昭
和五十六年十二月）。

（注8）鼎文書局刊「初学記」は、「水苔也」とするが、「芸文類聚」
（巻八十二・草部下・苔）、「太平御覽」（巻第一千・百卉部七・苔）
が「風土記曰」として引く本文は「水衣也」とあり、こちらが正
しいと思われるので、それに改めた。

（注9）「類聚名義抄」（観智院本）にも「薄_{（薄石衣）}」と記され、「薄」の
音は覃と同じで、「石衣」ともいうことが示されている。

（注10）菅野禮行校注・訳「和漢朗詠集」（新編日本古典文学全集19、
小学館、平成十一年十月）の当該摘句の頭注。

（注11）片桐洋一校注「後撰和歌集」（新日本古典文学大系6、岩波書
店、平成二年四月）の当該歌脚注。

（注12）当該歌の上句は、次の万葉歌に拠っている。
石走る垂水の上のさわらびの萌え出づる春になりけるかも

（注13）この「さるおかせ」の異名とされている「さがりごけ」は、
〔古今集〕の「物名」の歌に一首詠まれている。
花の色はただひとさかりこけれども返す返すぞ露は染めける

（注14）「堀河百首」のための「作歌研究会」については、拙書「堀河
院御時百首の研究」（風間書房、平成十六年五月）の第一章第一
節「堀河院御時百首」の成立事情とその一性格―類似歌をめぐ
って―」（初出は『女子大文学 国文篇』第三十六号、昭和六十
年三月）で言及している。

（注15）「苔（の）むしろ」に似た表現として「苔のしとね」があり、

なかなか苔のしとねをうちらはらひこの下陰は花にまされり
（能因集・一七二）
やさしやな苔のしとねに散りそむる花を衣にかさねてぞ寝る

（散木奇歌集・一一六）
などの例があるが、「文鳳抄」の「苔」の項に「茵」が挙げられ、
次のような漢詩文の例も見られる。

春風岸暖苔茵旧 暑月波寒水檻秋
（本朝麗藻・巻下・六三・藤原公任「同」諸知己錢塘水心寺之
作）

春風岸暖かに苔茵旧り 暑月波寒く水檻秋なり
苔作青茵鋪石上 山如画障繞窓東
（本朝無題詩・巻六・三九四・釈蓮禪「遊九条別業」）

苔は青茵と作りて石上に鋪き 山は画障の如く窓東に繞る

（注16）拙著「堀河院御時百首の研究」（風間書房、平成十六年五月）
の第二章第二節「堀河院御時百首」の歌語と和歌史的位置―そ
の二―」（初出は平安文学論究会編「講座 平安文学論究」第十
七輯、風間書房、平成十五年五月）、第三章第一節「万葉表現の
行方―「卯の花」に関して―」（初出は『国語と国文学』第六十
八巻第八号、平成三年八月）など。

（注17）泉紀子「諫鼓」小考」（『和漢比較文学』第八号、平成三年十
一月）に詳しい。

（注18）浅田徹「能因歌枕」原撰本と現存本」（『国文学研究』第九十
二集、昭和六十二年六月）によれば、現存の「能因歌枕（広本）」
には後世の増補部分があるというが、この引用箇所は、原撰本断
片の可能性のある部分に含まれる。

(注19) この万葉・一一二〇番歌は、早くは『和歌初学抄』の「両所ヲ詠歌」の項の「峯」の部に見え、『五代集歌枕』第二「峯」の「あをねがみね 大和」の条にも載せる。

(注20) 滝澤貞夫『堀河院百首全釈 下』(歌合・定数歌全釈叢書六、風間書房、平成十六年十一月)の「苔」の解題。

(付記) 本稿を成すに当たり、漢詩文について、北山円正、大平桂一両氏の御教示を得たところがある。なお、『堀河百首』の「苔」題の歌については、内藤愛子「堀河百首題「苔」をめぐって」(文教大学女子短期大学部文芸科『文芸論叢』第19号、昭和五十八年三月)があり、本稿で扱わなかった他の「苔」題の歌についても言及されているので、参看願いたい。